氷河期の記憶が刻まれたバナナで就労支援

熱帯で育つバナナが、高崎で収穫できる?! 多機能型事業所「ワークランドらくま」（高崎市楽間町）が、ビニールハウスで『高崎産バナナ』の栽培に初挑戦しています。その真相をリポート！

氷河期を疑似体験させ品種改良

高崎で本格的に栽培されるのは、通常のバナナではなく『凍結解凍覚醒法』という方法で品種改良されたバナナ。不可能といわれた国産バナナの栽培を可能にするため、約40年の歳月をかけてたどり着いた方法で、特許も取得しているとか。

その『凍結解凍覚醒法』とは、氷河期を乗り越えて世代をつないだ植物に着目し、植物の種子や細胞をマイナス60℃で凍結して氷河期を疑似体験させることで、超低温ストレスにより遺伝子内に記録された環境情報をリセット。これにより、植物の環境順応性が最大限に覚醒し、優れた耐寒性・耐暑性・病害抵抗性を発揮。栽培可能な地域を広げることに成功したといいます。

障害者の就労支援 賃金アップを目的に栽培

多機能型事業所「ワークランドらくま」では、バナナ栽培が短時間の作業で収益を上げやすいことから、通所者の就労支援として取組むことにしました。栽培の核となるのは同事業所の鈴木速人さんです。

北海道で福祉関係の仕事に就いていた鈴木さんは、障害者の働き場所が少なく、賃金もわずかなことにもどかしさを感じていたといいます。同事業所を経営する㈱おもつな（高崎市田町）の金田好正社長の誘いに応じて、鈴木さんは北海道を離れ、特別なバナナの栽培を手掛ける岡山県の農業法人「D&Tファーム」で3か月間の研修を経て、高崎にやってきました。

「こちらに来て5月中にビニールハウス内に240株を植えました。成長すると1株が3メートルほどになり、半年後の10月には実がつきます。1株に実るバナナの数は約200本。栽培の理想的な温度は28～32℃で、冬でも15℃以上を保つ必要があります。ハウス内での草むしり、枯れた葉や株の除去、水やり、収穫など、作業負担が少ない点がメリットです」と、鈴木さんは通所者の収入の安定化につながれば嬉しいと期待を膨らませます。

『凍結解凍覚醒法』はバナナだけでなく、あらゆる作物に応用可能です。「現在はバナナ、パパイヤ、パイナップル、グワバ、コーヒーの苗や実を販売しています」と話すD&Tファームの田中哲也代表。「ワークランドらくま」でも今後コーヒー栽培が検討されていて、「珈琲とやきものの㈱大和屋」の平湯聡社長も見学に来られました。
写真左から鈴木速人さん、田中哲也さん、平湯聡社長と、㈱おもつなの金田好正社長。

苗が生長して株になると、球茎（きゅうけい）から新しい株の芽（台芽（だいめ））が数本生えてきます。果実に栄養を与え、株の健康を維持するために、一本だけ残して取り除きます。残った台芽は、親株が果実を実らせて枯れた後、それに取って代わります。

“ハイスペック”な高級バナナ

『凍結解凍覚醒法』を施したバナナは、成長スピードが通常の2～ 3倍早く、収穫量も大幅にアップ。通常のバナナに比べて糖度が飛躍的に高く、甘くて濃厚な味わい。そのうえ、無農薬栽培、化学肥料不使用。収穫後にも洗浄剤や防カビ剤など一切不使用、皮も薄くて柔らかいので、“皮ごと食べられるバナナ”です。また、栄養学的にも通常のバナナより、炭水化物が少なく食物繊維が豊富。カロテン、ビタミンE、アミノ酸も豊富に含まれています。抗酸化力が高く茶褐色化が極めて遅いので、もぎたての品質を長く保つことができます。まさにいいとこいっぱいのハイスペックバナナですが、その市販価格は、なんと1本600円ほどとかなり高価。それでも新感覚のフルーツとして、ぜひ食べてみたいですね。